

遺構は語る懐深し松井田城

「水の手金石文字」

山 添 康 夫

平成三十一年一月二十四日、二十九日、三十日の三日間松井田城址バイパス側の四本の尾根の探査を行った。探査範囲はバイパスまでとしたが、いずれの尾根も険しいことから、谷からの敵の侵入は不可能と思われた。

補陀寺へ続く尾根を除いた他の三本の尾根では、いずれも見ごたえのある堀切等の造作を幾つも目にする事ができた。

バイパス側の地形は総じて峻険であり、天然の要害として十分である。

いずれの尾根からも主郭部への連結は容易に出来ないように高低差を設け、頭上には防御用建物をも配置する周到さであった。

最終日の午後三時頃、尾根の探査を終え、安中郭副郭と三郭の間の通路を経て「水の手」にさしかかったところ、木漏れ日からの光の加減で、正面の大石に何か描か

れているような感慨に襲われた。

普段からこの大岩は苔むしており、登るたびに何か刻まれているのではないかと立ち止まり、観察してはいたものの何ら見出すことはできなかった。

今回は苔の上からではあるが、文字らしきもの存在を感じたのである。この気配を一緒に山に入った石井俊介氏に伝えたところ、彼は付近のシダ類の葉を駆り集め束ね、大石の苔の表面を擦りだした。

すると、微かではあるが漢字の「四」の字が縦に二個、更に、右側に縦に「二十一」と読み取れる文字が平行に出現した。

この大石は表面部分が長径百七センチメートル、短径八十センチメートルで長方形がかっており、重量は一トン程度と思われる、短径を地面比四十五度程、バイパス方面に向け佇んでいる。

この石の左上部に縦二十六センチメートル、横三十センチメートルの範囲に五文字が刻まれているのである。

上部の「四」は縦八センチメートル、横十一センチメートルであり、下部の「四」は縦九センチメートル、横十三センチメートル程であった。上側の「四」と「二

の上部六センチメートル付近に、薄い直線のような溝が刻まれているが明瞭ではないことから、拓本、カメラの映像での確認は不可能であった。

近代の悪ガキの仕業かとも思いつつ、もし落城時の何らかの備忘的記録文字としたら大変な発見となり、松井田城址も一躍有名になるなどと勝手な想像をも描いてしまった。

翌日の午前中に拓本用品を買い込み、午後三時頃、同行してくれることになった嶋村純一氏と現場に入った。

拓本を念入りに取るものの、荒い岩肌は文字の痕跡の出現さえ遮り大失敗であった。やむなく、薄闇の中、写真の撮影を行ったが、鮮明度はもう一步であった。

二月二日、午前十時前から大石の表面の清掃を行った。ペットボトルの大瓶を五本ほど担ぎ上げ、水を注ぎつつ束子で苔をそぎ落とす作業であった。幾分満足できる状態になったので、大石の表面が乾くまで一旦家に戻った。

午後二時頃から、片栗粉を文字の表面に散布し文字溝を鮮明に顕わす作業を試みた。すると右側縦に「二十一」と肉眼では読めていたが、「二」の二画目の左部分に縦の線が刻まれており、バランスの悪い「十」が

出現した。

北国勢の松井田城攻めでは、真田勢は城下（根小屋）であった現在の高梨子方面に布陣したと伝えられるが、資料においても、真田昌幸は天正十八年四月七日付で「上野国中悉放火仕、其上松井田之地根小屋撃碎」の旨を、石田三成に報告していることが確認できる。

これをうけ、秀吉は四月十四日付で真田昌幸、信幸父子に対し松井田根小屋を焼き払い、城を包囲したことに満足の意を表している。

更に、四月十六日付で秀吉は四月十日の報告で、松井田城の「水の手」を押さえたことを聞き満足の旨を、上杉景勝、前田利家に伝えている。

伊達家文書には、守屋意成が四月二十二日付の書状で、二十日に大道寺政繁は開城降伏をした旨を伝えた記録が残る。

要は、七日に高梨子を焼き払い、十日に「水の手」を抑え、二十日には松井田城が落城したことになる。

これを踏まえ、この大石の数字の謎解きを行うと、前提として、戦時のあわたましい状況下で書かれた備忘的な記録ではないかと捉えるのが妥当に思われた。そ

して、刻者は真田勢の記録担当の兵士であり、数字は日付と仮定してみたらどうだろうか。

この時期、松井田城攻めの北国勢は各大名とも功名に焦り、逐一、秀吉サイドに手柄の書状を発していた。

必然的に、秀吉への報告は正確性が求められる。真田勢の担当者としても、日時の記録は命がけであったと考えられる。間違えれば、首が飛ぶ状況下であったはずである。

さて、「水の手」の大石に刻まれた文字について、下段からは四月十一日と読み解き「水の手」を抑えた日と考えると、十日の夜襲により占領し、記録は朝方の十一日としたのか、実際は十一日であったのかもしれない。

上段は、山籠もり後の落城した日、四月二十日と読み解けるのではないか。「二」の下に「十」を記入すべきであったがスペースがないことから、「二」の二画目の左部分に縦の線を刻み「十」とし、二十日と記録せざるを得なかったのではないだろうか？

でも間違えてはならないことがある。近世では「二十」の表記は「廿」であるはずだ。「二」「十」「十一」はあっても「二十」「二十一」は無いのである。こじつけにはしり肝心なことを見失っていたのかもしれない。

それとも、五文字の内「二」の刻みは、他に比べ太く深いことから、元々、一字で存在したのかもしれない。中世の金石文は専門の石工によって刻まれた端正なものが多い。本件は一見、稚拙とも見えるが、戦時下の備忘と思えば拡大解釈ができないこともない。

多分、後世の悪戯の可能性も大きいと思われる。この記事を開きつけた悪戯者が忽然と現れるかもしれないのだ。

それにしても、当人は相応の歴史的知識と堅い石にも鑿を入れる器量を持ち合わせ、人々を煙に巻き、遺物を汚すことに何ら躊躇わない心持の悪いイメージがつきまとう。

仮に、当時の記録と認定されれば、松井田城は一層注目されることになるだろう。後世の悪戯ということになれば、それはそれでやむなしと思うほかはない。

昔の下にも、もしかしたらの可能性のある文字が眠っていたと考えれば、一喜一憂する必要もない。それほど、松井田城はロマン（冒険、空想、夢）を秘めているのである。

(参考文献)

安中市史第四卷

戦国遺文真田氏編第一卷



水の手の大石と作業中の筆者



表面の苔を除去した状態 この状態でも文字が見える。



白い粉で文字を識別しやすくした状態。

